

正 誤 表

以下の箇所には誤りがありました。おわびの上、訂正させていただきます。

凡 例 1 頁め下段	【戸定本】⇨松戸市戸定歴史館所蔵資料 を削除 ↓【慶喜家本】⇨徳川慶朝氏（慶喜家）所蔵資料
凡 例 3 頁め下段	協力者一覧に、徳川慶朝氏を加える
1 4 0 頁⇨1 4 2 頁下欄	【戸定本】をすべて【慶喜家本】に改める
1 5 2 頁1 0 行め	與々 <small>（カ）</small> を削除 ↓ 悠々
1 8 1 頁下段最後から1 行め	松戸市戸定歴史館には を削除 ↓ 徳川慶朝氏所蔵資料中に
1 8 2 頁上段2 行め	所蔵されている。を削除 ↓ ある。

江戸東京博物館史料叢書

勝海舟関係資料 文書の部

東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室編

三
不
主
六

三十一

下
之
所

行
小
路
也
經
者
必
由
此
道

石江，極其是也。年長後，乃防其子，乃其子。

[illegible][illegible]

土月

抄

[illegible]

写真 4 18 勝海舟歎願書草稿（京都新政府軍の江戸攻撃に対する代訴文）

一九五一年

勿忘群不遺忘

口餘のふちと中絶はつて居る

少頃、王、臣、を、召、し、ひ、あ、は、れ、し、

日之身之珍之得

東の正通と名洋の正通と名

六十二卷 卷之六十二 卷之六十二

王商曰：此乃王莽之計，欲以誅之。

卷之六

一、學子之志氣

[illegible]

除方外除とあるは、

金
 四
 不
 一
 化
 中

丁酉年之秋と云ふは

一、此等文字 此等文字

此より書き送るよしをいふ

— 302 —

id est, quod

○昨交定本諸君收

山陰路術社書藏

此は書物に於て、

江戸幕府の御用金

опыт работы в области

命之極處也

[Faint handwritten notes]

後之修志者其必以爲然乎

飲戰國上卷

長樂縣志

陽明先生遺集

李成子

2000-01-01

事はくはくやうにわたり

鐵山正志

會社の爲に情を盡しん

今更に新編を發行せしむ

遠
日之五帝為古之天子之有也

James H. Smith

九年

$$\frac{1}{2}$$

口物之入筆

高師

目次

1	勝海舟意見書写〔伊勢両宮御警衛向ニ付申上候書付〕	安政二年四月……………	1
2	勝海舟宛島津斉彬書簡	(安政五年) 四月十二日……………	6
3	勝海舟宛松平信敏書簡	(文久三年) 七月八日……………	11
4	勝海舟意見書写〔江戸御警衛〕	(文久三年八月)……………	15
5	勝海舟意見書草稿〔御府内四方堡塞大略〕	(文久三年八月)……………	24
6	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(文久三年) 九月十日……………	30
7	勝海舟宛松平春嶽書簡	(文久三年) 十一月十日……………	35
8	勝海舟意見書草稿〔徳川家茂再上洛につき〕	(文久三年) 十一月(十二日頃)……………	40
9	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(元治元年二月六日)……………	46
10	佐久間象山遭難報告書	(元治元年) 七月十六日……………	48
11	勝海舟意見書草稿〔第一次長州征討につき〕	(元治元年八月以降)……………	57
12	勝海舟宛西郷隆盛書簡	(元治元年) 九月十一日……………	61
13	勝海舟宛土方歳三書簡	(元治元年) 九月十六日……………	63
14	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(慶応元年) 十月五日……………	66

15	勝海舟同書草稿（「芸州表江為御用向罷越候心得伺」）	（慶応二年）八月十七日	70
16	御沙汰書（和宮警衛と帰洛の便宜につき）	（慶応四年正月受領）	73
17	御沙汰書副状	（慶応四年正月受領）	75
18	勝海舟歎願書草稿（京都新政府軍の江戸攻撃に対する代訴文）	（慶応四年正月十八日）	77
19	勝海舟意見書草稿（京都新政府へ関東の実情につき訴文）	（慶応四年二月十五日）	80
20	勝海舟宛西郷隆盛書簡	（慶応四年）三月十四日	83
21	東征大総督府委任書（江戸鎮撫につき）	慶応四年閏四月二日	84
22	勝海舟歎願書写（徳川慶喜江戸帰住につき）	慶応四年閏四月（四日）	85
23	勝海舟意見書草稿（「人心離散之御答」）	（慶応四年）閏四月二十八日	92
24	勝海舟宛八田知紀書簡	（慶応四年）七月十三日	96
25	勝小鹿海外渡航許可証写	明治二年六月九日	104
26	勝海舟宛柳原前光書簡	（明治二年）十月七日	109
27	富田貞次郎宛勝海舟書簡	（明治四年）正月八日	112
28	勝海舟宛大山綱良書簡	（明治五年五月）二十六日	115
29	勝海舟宛三条実美書簡	（明治五年）十一月朔日	117

30	勝海舟意見書草稿（台湾出兵につき）	（明治七年五月頃）	119
31	内達（台湾出兵につき）	明治七年八月二日	121
32	内達演説書（台湾出兵につき）	（明治七年八月二日）	122
33	勝海舟意見書写（徳川家手許金につき）	（明治十年以前）	124
34	松平春嶽宛勝海舟書簡（付副状）	（明治十九年）十一月十八日	126
35	勝海舟意見書写（条約改正につき）	（明治二十二年）十月二十日	130
36	勝海舟宛柴田松之丞歎願書	明治二十六年八月十五日	133
37	勝海舟意見書写（「徳川家々政ニ付愚存」）	明治二十七年七月	140
38	勝海舟意見書草稿（「朝鮮所置愚説」）	明治二十八年五月二十一日	143
39	勝海舟意見書草稿写（「五月之私議草稿扣」）	明治二十八年五月	147
40	勝海舟意見書草稿（「近事私議第一」）	明治二十八年十一月二十一日	150
解	説・資料解説	落合則子	155
	江戸東京博物館所蔵「勝海舟関係資料」マイクロフィルム版目録		185

凡 例

一 本書は、東京都江戸東京博物館所蔵勝海舟関係資料のうち、文書類計四〇点を翻刻したものである。

一 文章の配列は、おおむね発給順とした。

一 資料名のうち、意見書については（ ）でその内容を付した。そのうち、原資料に記された表題は、「」で括った。なお、当館の資料情報システム上の資料名と本書で付けた資料名は、かならずしも一致しない。

一 各文書の見出しで標記した作成・発給等の年月日は、漢数字を用い、元年・正月・朔日の記述は原記述のままとした。また、（ ）内のものは、推定である。

一 本書では翻刻にあたり、既刊の『海舟全集』（改造社刊）『勝海舟全集』（勁草書房刊）『勝海舟全集』（講談社刊）と校合をおこなった。さらに、「海舟日記」（自筆本 江戸東京博物館蔵）にも収められている文書については、これと

の校合もおこない、また各全集に未収載の文書で、当館外にあり、今回原本の閲覧ができたものとの校合もおこなった。各文書の釈文の下に欄外に、文言の異同を注記した。

注記欄の記号は以下のとおりである。【改】＝改造社版全集、【勁】＝勁草書房版全集、【講】＝講談社版全集、【日記】＝「海舟日記」原本、【戸定本】＝松戸市戸定歴史館所蔵資料、【富岡本】＝富岡美術館所蔵資料

一 なお、同一の内容で底本を異にする文書が、一つの全集の中に重複して収蔵されている場合は、より一次史料に近いものを選択して、校合の対象とした。

たとえば「18 勝海舟歎願草稿」が講談社版全集第1巻（「慶応四戊辰日記」）と第2巻（「上書建言」）の両巻に収蔵されている場合は、自筆原本を底本にしている第2巻の方を採用した。

一 翻刻にあたり、原文書の様式を尊重するようにつとめた

が、編集の都合により、原文書の形態を損なわない程度に、つぎのようにした。

- 1 文中に適宜、読点（、）および並列点（・）を加えた。
- 2 漢字は、当用漢字・常用漢字にあるものは、原則としてこれを用い、ないものは正字を用いた。また、異体字は「扣」≡「控」「杯」≡等は原表記のままとし、それ以外は当用・常用漢字に改めた。
- 3 利用者の読解を助けるため、難読な熟語や文字には適宜ルビをふり、意味の通りにくい仮名表記には漢字を補って（ ）で括った。
- 4 宛字・誤字・衍字はそのまま表記して、右傍に（ママ）（衍カ）を付した。正しい文字がわかる場合は、右傍に（○○カ）と記した。
- 5 変体仮名は、原則として同音の平仮名に改めたが、「而」「得」「江」「之」は原文表記のままとした。また、「箇所」

「斯様」「一箇」などの「カ」「コ」を表すケは残した。
6 合字は平仮名にあらためた。

7 欠損、または判読不明の文字は、□□…（字数分）、〔 〕（字数不明）で示し、触損などは右傍に（虫損）（欠損）と記した。

8 踊り字は、漢字は々、平仮名はゝ、片仮名は、を用いた。大返しは「く」（字数分）を用いた。

9 原文中、削除された文字は、左傍に見せ消ちゝ、または削除された文字上に――を付した。

10 原文中の補記や加除訂正は、原型を活かすようにつとめ、当該箇所の左傍あるいは右傍に訂正された文言を記した。必要と思われる部分については、下欄注記で読み方を記した。なお、一文字程度の加筆で意味上とくに変化がないものは、本文中に繰り入れた。

11 朱書は、その部分を「」で括り、右傍に（朱書）と

記した。

一 巻末に、本書の解説と各文書についての解題を付した。

なお、解説等で使用する年代表記は、明治五年十二月二日までは、和暦で表示し、必要に応じて（ ）にその年の大部分を含む西暦年次を記した。暦が太陽暦に改められた旧暦の明治五年十二月三日（明治六年一月一日となる）以降は、新暦表記とした。また、改元された年は正月元日に遡り、改元後の元号を使用した。ただし、一世一元制が実施された西暦一八六八年は、明治改元の九月八日（西暦一八六八年十月二十三日）以降は明治元年、九月七日以前は慶応四年を用いた。

一 編集には、近松鴻二（当館都市歴史研究室歴史研究科長）・落合則子（同学芸員）があたり、藤田英昭（中央大学大学院生）・保垣孝之の協力を得た。また、櫛野義明氏（講談社版『勝海舟全集』編纂員）からは、貴重な助言を得た。

一 当館外の資料調査にあたっては、下記の諸機関等の協力を得た。ここに深く謝意を表する。

国立国会図書館憲政資料室 東京大学史料編纂所

早稲田大学図書館特別資料室 福井市立郷土歴史博物館

松戸市戸定歴史館 富岡美術館 講談社

松平宗紀 印牧信明 斉藤洋一 浅井京子

（順不同 敬称略）

一 なお、当館では、本書収載文書を含む館蔵勝海舟関係資料のマイクロフィルムによる閲覧を実施している。本書巻末に、江戸東京博物館所蔵「勝海舟関係資料 マイクロフィルム版目録」を付したので、あわせて利用いただきたい。

江戸東京博物館
史料叢書
勝海舟関係資料 文書の部

発行日 平成十三年三月二十二日

編集 東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室

発行 (財)東京都歴史文化財団
東京都江戸東京博物館
〒130-0015

東京都墨田区横網一丁目四番一号
TEL 〇三―三六二六―九九一八 (研究室)
FAX 〇三―三六二六―八〇〇二

印刷 勝田印刷株式会社

ISBN 4-924965-30-8C0021